

エコ・ジャパン・ カップ受賞報告

福島県

(有)仲田種苗園

仲田茂司

エコ・ジャパン・カップは、環境省などが主催する環境ビジネスの登壇です。二〇〇九年で四回目となります。

この度、仲田種苗園の「地域性種子を活用した都市の生物多様性の復元」(商品名:野の花マット)が、ビジネス・ベンチャー・オアンの銅賞、「J.P.地域共生ビジネス賞」(賞金五〇万円)を受賞しました。審査は三次まであり、国領二郎慶大教授と北野大明大教授をはじめ、日本郵政グループ(JP)、三井住友銀行、日本総合研究所、日本政策投資銀行、小池百合子環境大臣創設の環境ビジネスウイメンなど様々な

る方々に審査していただきました。過去の受賞企業は、大都市のエネルギー関係のメーカーやコンサルタント会社です。仲田種苗園のような地方の、しかも農業生産法人としては初受賞です。仲田種苗園は、創業以来四〇数年間、在来種一筋に生産してきました。生産理念は「在来種(主)義」と「生態系の生産者」です。二〇〇二年からは、オアシナルの植生ターフである「野の花マット」(アゼターフ)を開発し、主に高層部の屋上緑化や校庭緑化に使っていただいています。

「野の花マット」の新規性は、一マット当たり二五種以上の花野草を寄せ植え



「野の花マット」生産の様子

性が復元された事例です。また子供は野の花や虫が大好きです。練馬区など都内の小学校では、「野の花マット」を植栽して、環境教育に役立てようとする所が増えていきます。

「野の花マット」生産は、種子の供給源としての、豊かな里山が存在してはじめて成立する地場産業です。したがって仲田種苗園では、「野の花マット」生産の当

事として、春の花、夏の花、秋の花が順を追って咲くために、一マットでも四季を楽しむことができます。二〇〇九年に、特許を取得しました。

「野の花マット」は、無農薬栽培であるために、コオロギやバッタなどの小生動物が生息します。また野の花を求めて、チョウやトンボが飛来します。二〇〇七年に竣工した東京都大崎の世界貿易センタービル・シンクパークでは、「野の花マット」(アゼターフ)が二〇〇平米ほど植栽されました。都心とは思えないほど、チョウやトンボが乱舞しています。「野の花マット」により都市の生物多様



1月12日 環境省での懇談会
小沢鋭仁環境大臣(左端)と仲田茂司氏(右端)

初から、里山整備などの地域興しに積極的に関わってきました。「野の花マット」生産事業の新規性と将来性に加えて、地域興しと連携した社会性が評価されて、J.P.賞を受賞することができました。

本年二月十二日、受賞者として、小沢鋭仁環境大臣と懇談しました。大臣との懇談は、過去4回のエコ・ジャパン・カップでも初めてのことでございます。邸下からすべて紙摺張りのVIP階にあるVIP室(大臣室と副大臣室の間)で、日の丸を背にしながら、懇談しました。小沢環境大臣は、このほか、「野の花マット」に興味を寄せられ、作り方や単価など多くの質問をいただきました。

本年十月には、生物多様性の国際会議が名古屋で開催されます。国のひとつの環境政策の柱である温暖化防止はエネルギーの排出抑制に重点が置かれがちですが、生物多様性は植物が主役となるべきです。植物は生態系の生産者です。植物だけが、無機質を有機質にかえて、動物の栄養源を作ることができます。したがって、当社の生産理念とさせていただきますように、植物を生産している私たちは、生態系を生産していることになります。

生物多様性をCSR(企業の社会的責任)の柱とす

る企業が増えています。大手ゼネコはもろろんと、大手銀行など、従来は私たちのターゲットではなかったところまで、生物多様性に強い関心をもっています。生物多様性の国際会議がある本年は、私たち植物生産者にとって、千載一遇の機会、飛躍の年です。五月には、名古屋で「都市における生物多様性とアザ

イン」という国際学術会議が開催されます。私も、「The restoration of the urban biodiversity using the native plants」(在来種植物を活用した都市の生物多様性の復元)という題で、発表を申し込んでいます。英語は苦手ですが、千載一遇の機会をフルに活用したいと思っています。